

# 専門高校における 職業的レリバンス意識と進路不安

——教育内容の習得度とその学校外活用機会の多寡に着目して——

小山 治（東京大学大学院特任助教）

## ◇ 要約

- ◎専門高校において教育内容の職業的レリバンス意識が高まることは、進路不安に対して功罪をもたらす。功の側面として、職業的レリバンス意識が高まると、「どんな仕事をしたいかわからない」という進路不安が低減する。罪の側面として、職業的レリバンス意識が高まると、「将来、社会でうまくやっっていけるか不安だ」という進路不安が増大する。
- ◎職業的レリバンス意識が高まるのが進路不安に対してもたらす功罪は、教育内容の習得度やその学校外活用機会の多寡によって顕在化したり、顕在化しなかったりする。
- ◎職業的レリバンス意識と進路不安の結びつきは、進路不安に関する個別の変数によって異なっている。また、教育内容の習得度やその学校外活用機会の多寡という前提条件を踏まえると、専門高校においては、職業的レリバンス意識を高めさえすれば、進路不安が低減するという単純な図式は成り立たない。

## 1 問題設定

本稿の目的は、専門高校の生徒を対象にして、教育内容に対する職業的有効性の認識（以下、職業的レリバンス意識と略記する）が高まるのが進路不安に対してもたらす功罪は何かという問いを明らかにすることである<sup>1</sup>。

2000年代以降、キャリア教育の推進により、高等学校段階でも生徒の将来像を念頭に置いた自己理解の推進、職場体験の重要性、教育内容（学習）の有用性の認識の向上が社会的な注目を集めている（たとえば、文部科学省 2004）。こうした社会的背景を踏まえると、専門高校は将来の職業・仕事を念頭に置いた中等教育機関であるという意味で、意図的か無

意図的かにかかわらず、従来から実質的なキャリア教育を行ってきた先行事例として位置づけることができるだろう。実際、専門高校の生徒は、普通科高校の生徒と比べて、教育内容の職業的レリバンスを認知していることが明らかにされている（伊藤 2006）。

このように、専門高校は、職業的レリバンス意識の形成という視点からみると、一見、望ましい教育を行っているようにみえるかもしれない。しかし、大桃（2009）は、専門高校において共同実践型授業に熱心に取り組むことが「将来、社会でうまくやっっていけるか不安だ」という進路不安を高めてしまうという逆説を指摘している。ここから推測すると、専門高校において職業的レリバンス意識が高

まることが生徒の進路不安に対してもたらず功罪2つの側面を実証的に明らかにしておく必要があると考えられる<sup>2</sup>。職業的レリバンス意識が高まることを無批判に「望ましい」ことであると自明視するのではなく、当該意識の向上がどのような進路不安を低減し、どのような進路不安を増大してしまうのかという点をひとまず把握しておくことで、職業的レリバンス意識が高まることのメリットとデメリットの双方を明らかにできるだろう。

その際に、本稿では、先行研究で使用されてきた進路不安に関する変数を個別に丁寧にみていくことにする。なぜなら、後述するように、先行研究では進路不安に関する合成変数を作成し、それを従属変数とした分析が行われているが、合成変数の内的整合性を示すアルファ係数は必ずしも高くないからである。本稿の分析によれば、先行研究が用いてきた進路不安に関する変数を個別に分析してみると、それらの変数と職業的レリバンス意識との結びつきは異なっていることが明らかになる。また、本稿では、単に職業的レリバンス意識と進路不安の関係性だけをみるのではなく、その前提条件として、教育内容の習得度とその学校外活用機会の多寡に着目した分析を行う。分析の結果、そうした前提条件によって、職業的レリバンス意識と進路不安の関係性が異なっていることが明らかになる。

本稿の構成は次の通りである。2節では、高校生の進路不安に関する先行研究の知見を確認し、その問題点を整理・検討する。3節では、先行研究の検討を踏まえて、仮説の設定を行い、その検証に必要な変数の設定を行う。4節では、職業的レリバンス意識を独立変数とし、進路不安を従属変数とした分析を行う。5節では、分析結果をまとめて、その含意を指摘し、残された課題について言及する。

## 2 先行研究の検討

まず、先行研究の検討によって、本稿の意義を論証する。

質問紙調査データをもとにして高校生の進路不安を正面から分析した先行研究としては、本田（2005, 2006）と佐藤（2006）が挙げられる。

本田（2005, 2006）は、高校生の進路不安の規定要因を分析している。そこでの進路不安とは、「どんな仕事をしたいのかよくわからない」「自分の進路について今でも悩んでいる」「社会でうまくやっっていけるか不安だ」といった3項目からなる合成変数である（アルファ係数は0.5401）。分析の結果、男子では専門学科（高校）ダミー変数は進路不安を低減すること、専門学科ダミー変数は進学志望を低減することなどが明らかにされている。

一方、佐藤（2006）は、本田（2005, 2006）と同一のデータをもとにして、「どんな仕事をしたいのかよくわからない」「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」「自分の進路について今でも悩んでいる」「社会でうまくやっっていけるか不安だ」といった4項目からなる合成変数を「着地不安」と呼称し、その規定要因を分析している（アルファ係数は0.6271）。分析の結果、専門学科（高校）ダミー変数は「着地不安」を低減すること、「勉強は就職に役立つ」という意識は「着地不安」と無相関であることなどが明らかにされている<sup>3</sup>。

以上のように、本田（2005, 2006）と佐藤（2006）は、高校生の進路不安を正面から分析した重要な先行研究であるものの、次の2つの問題点がある。

第1に、進路不安に関する変数の取り扱いにやや疑問が残る。本田（2005, 2006）と佐藤（2006）は同一のデータを分析しているにもかかわらず、進路不安に関する合成変数の操作的定義が異なる。また、いずれの先行研究においても、進路不安に関する合成変数のアルファ係数はそれほど高いとはいえない。したがって、進路不安に関する変数については、合成変数を作成する前に、個別の項目を丁寧に分析しておく必要があると思われる。そこで、本稿では、本田（2005, 2006）と佐

藤（2006）で共通に使用されている進路不安に関する変数として、「どんな仕事をしたいかよくわからない」「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」「将来、社会でうまくやっつけられるか不安だ」を取り扱う<sup>4</sup>。

第2に、専門高校の内部における職業的レリバンス意識の分析が十分に行われていない。本田（2005, 2006）と佐藤（2006）では、専門高校に在学することで普通科高校に在学するよりも進路不安が低減されるということ、高校生全体でみると「勉強は就職に役立つ」という意識は「着地不安」と無相関であることは明らかにされている。しかし、相対的にみれば、職業と密接に関連した教育を行っている専門高校の内部で職業的レリバンス意識が高まると進路不安に対してどのような影響が及ぶのかといった点は十分に明らかにされていない。そこで、本稿では、専門高校の生徒を対象にした分析を行う。

### 3 仮説と変数の設定

前節における先行研究の検討を踏まえて、仮説の設定を行う。

本田（2005）によれば、現在は、専門性とは対極的ともいえる能力である「ポスト近代型能力」（たとえば、コミュニケーション能力）が社会的地位の選抜・配分の主たる基準となる「ハイパー・メリトクラシー化」という社会状況にある。この点を踏まえれば、専門高校において職業的レリバンス意識が高まることには、功の側面だけでなく、罪の側面もあると考えられる。具体的には、職業的レリバンス意識が高まると、それまでよりも将来やりたい仕事が意識されるようになるため、「どんな仕事をしたいかよくわからない」「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」といった進路不安は低減すると予想される。一方、職業的レリバンス意識が高まると、専門教育で身につけた専門性が「ハイパー・メリトクラシー化」した社会では齟齬をきたすという認識が生じてしまうため、「将来、

社会でうまくやっつけられるか不安だ」という進路不安は増大すると予想される。

また、教育内容の習得度やその学校外活用機会の多寡といった前提条件によって、職業的レリバンス意識が進路不安に対してもたらす影響は異なってくると考えられる。まず、教育内容の習得度についてみると、「どんな仕事をしたいかよくわからない」「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」といった進路不安は、習得度が中レベル以上の場合に、職業的レリバンス意識の向上によって低減すると予想される。なぜなら、基礎的な教育内容を習得していなければ、職業的レリバンス意識のみが高まっても、希望する仕事への到達可能性は高まらないと考えられるからである。一方、「将来、社会でうまくやっつけられるか不安だ」という進路不安は、習得度が低い場合に、職業的レリバンス意識の向上によって増大すると予想される。なぜなら、習得度が低いと、専門性を1つの拠り所として社会を生き抜いていくことの困難性が認識されてしまうと考えられるからである。

次に、教育内容の学校外活用機会の多寡についてみると、「どんな仕事をしたいかよくわからない」「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」といった進路不安は、学校外活用機会が多い場合に、職業的レリバンス意識の向上によって低減すると予想される。なぜなら、学校の勉強を実社会で活用することで、希望する仕事が明確化すると考えられるからである。一方、「将来、社会でうまくやっつけられるか不安だ」という進路不安は、学校外活用機会が少ない場合に、職業的レリバンス意識の向上によって増大すると予想される。なぜなら、学校の勉強を実社会で活用する機会が少ないと、身につけた専門性を「ハイパー・メリトクラシー化」した社会の中で運用する術が見出しにくくなると考えられるからである。

以上から、本稿の仮説は次のようになる<sup>5</sup>。

●理論仮説1：専門高校において職業的レリ

バンス意識が高まることは、進路不安に対して功罪をもたらす。

- 作業仮説1-1：学校での勉強は将来つきたい仕事に関係していると思っている者ほど、どんな仕事をしたいかよくわからないとは思わない（功の側面）。
- 作業仮説1-2：学校での勉強は将来つきたい仕事に関係していると思っている者ほど、自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いとは思わない（功の側面）。
- 作業仮説1-3：学校での勉強は将来つきたい仕事に関係していると思っている者ほど、将来、社会でうまくやっていけるか不安に思う（罪の側面）。

●理論仮説2：専門高校において職業的レリバンス意識が高まることで進路不安に対してもたらす功罪は、教育内容の習得度によって顕在化したり、顕在化しなかったりする。

- 作業仮説2-1：学校での勉強は将来つきたい仕事に関係していると思っている者ほど、どんな仕事をしたいかよくわからないとは思わないという関連は、校内成績が上・中の集団においてみられる。
- 作業仮説2-2：学校での勉強は将来つきたい仕事に関係していると思っている者ほど、自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いとは思わないという関連は、校内成績が上・中の集団においてみられる。
- 作業仮説2-3：学校での勉強は将来つきたい仕事に関係していると思っている者ほど、将来、社会でうまくやっていけるか不安に思うという関連は、校内成績が下の集団においてみられる。

●理論仮説3：専門高校において職業的レリバンス意識が高まることで進路不安に対してもたらす功罪は、教育内容の学校外活用機会の多寡によって顕在化したり、顕在化しなかったりする。

- 作業仮説3-1：学校での勉強は将来つき

たい仕事に関係していると思っている者ほど、どんな仕事をしたいかよくわからないとは思わないという関連は、授業で学んだことを、学校外で活かせる機会が多い場合にみられる。

- 作業仮説3-2：学校での勉強は将来つきたい仕事に関係していると思っている者ほど、自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いとは思わないという関連は、授業で学んだことを、学校外で活かせる機会が多い場合にみられる。
- 作業仮説3-3：学校での勉強は将来つきたい仕事に関係していると思っている者ほど、将来、社会でうまくやっていけるか不安に思うという関連は、授業で学んだことを、学校外で活かせる機会が少ない場合にみられる。

表1は、本稿の分析で使用する変数の操作的定義をまとめたものである。

## 4 分析

それでは、分析に入ろう。本稿では、専門高校の生徒のみが分析対象となる<sup>6</sup>。また、分析に際しては、ウェイト1の重みづけを使用する。

### 4.1 作業仮説1の検証：進路不安と職業的レリバンス意識の関連

まず、作業仮説1の検証を行う。

表2は、作業仮説1-1～3を検証したものである。それによれば、次の3点がわかる。

第1に、「学校での勉強は将来つきたい仕事に関係している」という項目に「あてはまる」と回答した者の中で、「どんな仕事をしたいかよくわからない」という項目に「あてはまる」と回答した者は51.4%であるのに対して、「学校での勉強は将来つきたい仕事に関係している」という項目に「あてはまらない」と回答した者の中で、「どんな仕事をしたいかよくわからない」という項目に「あて

表 1 分析で使用する変数の操作的定義

| 質問番号     | 変数名                   | 操作的定義   |
|----------|-----------------------|---|
| Q9B      | (教育内容の)<br>職業的レリバンス意識 | Q9B「学校での勉強は将来つきたい仕事に関係している」という項目に「とてもあてはまる」または「まああてはまる」と回答した場合を「あてはまる」とし、「あまりあてはまらない」または「まったくあてはまらない」と回答した場合を「あてはまらない」とする。  |
| Q11B     | (教育内容の) 習得度           | Q11B「同じ学校にいる高校2年生の中で」の成績(校内成績)が「1(下のほう)」または「2」を「下」、 「3(中くらい)」を「中」、 「4」または「5(上のほう)」を「上」とする。  |
| Q18D     | (教育内容の)<br>学校外活用機会の多寡 | Q18D「授業で学んだことを、学校外で活かせる機会が多い」という項目に「とてもあてはまる」または「まああてはまる」と回答した場合を「あてはまる」とし、「あまりあてはまらない」または「まったくあてはまらない」と回答した場合を「あてはまらない」とする。  |
| Q51A・B・F | 進路不安                  | Q51A「どんな仕事をしたいかわからない」、Q51B「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」、Q51F「将来、社会でうまくやっていけるか不安だ」といった各項目について、「とてもあてはまる」または「まああてはまる」と回答した場合を「あてはまる」とし、「あまりあてはまらない」または「まったくあてはまらない」と回答した場合を「あてはまらない」とする。 |

表 2 「進路不安」×「職業的レリバンス意識」

| 分析対象は専門高校の生徒 Q51A・B・F×Q9B |                 |         |                        |         |                     |         |
|---------------------------|-----------------|---------|------------------------|---------|---------------------|---------|
| 学校での勉強は将来つきたい仕事に関係している    | どんな仕事をしたいかわからない | N       | 自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う | N       | 将来、社会でうまくやっていけるか不安だ | N       |
|                           | *               |         |                        |         | **                  |         |
| あてはまる (%)                 | 51.4            | (1,281) | 42.0                   | (1,275) | 78.0                | (1,273) |
| あてはまらない (%)               | 55.9            | (997)   | 41.4                   | (994)   | 72.1                | (992)   |
| 合計 (%)                    | 53.3            | (2,278) | 41.7                   | (2,269) | 75.4                | (2,265) |

注 1) 数値は、「どんな仕事をしたいかわからない」「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」「将来、社会でうまくやっていけるか不安だ」という項目に「あてはまる(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」)」と回答した者の比率または実数を指す。  
 注 2) +: p<0.10, \*: p<0.05, \*\*: p<0.01, \*\*\*: p<0.001。

はまる」と回答した者は55.9%である。この差は5%水準で有意となっている。つまり、職業的レリバンス意識の向上には、「どんな仕事をしたいかわからない」という進路不安を低減する功の側面がある。以上から、作業仮説1-1は採択された。

第2に、「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」という項目の回答については、「学校での勉強は将来つきたい仕事に関係している」という項目への回答による差がみられない。以上から、作業仮説1-2は棄却された。

第3に、「学校での勉強は将来つきたい仕事

事に関係している」という項目に「あてはまる」と回答した者の中で、「将来、社会でうまくやっていけるか不安だ」という項目に「あてはまる」と回答した者は78.0%であるのに対して、「学校での勉強は将来つきたい仕事に関係している」という項目に「あてはまらない」と回答した者の中で、「将来、社会でうまくやっていけるか不安だ」という項目に「あてはまる」と回答した者は72.1%である。この差は1%水準で有意となっている。つまり、職業的レリバンス意識の向上には、「将来、社会でうまくやっていけるか不安だ」という進路不安を増大する罪の側面がある。以

表3 「進路不安」×「職業的レリバンス意識」×「習得度」

| 分析対象は専門高校の生徒 Q51A・B・F×Q9B×Q11B |                        |                   |         |                        |         |                     |         |
|--------------------------------|------------------------|-------------------|---------|------------------------|---------|---------------------|---------|
| 校内成績                           | 学校での勉強は将来つきたい仕事に関係している | どんな仕事をしたいかよくわからない | N       | 自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う | N       | 将来、社会でうまくやっていけるか不安だ | N       |
| 上                              | あてはまる (%)              | 46.3              | (285)   | 34.9                   | (284)   | 78.0                | (282)   |
|                                | あてはまらない (%)            | 57.3              | (157)   | 41.4                   | (157)   | 74.2                | (155)   |
|                                | 合計 (%)                 | 50.2              | (442)   | 37.2                   | (441)   | 76.7                | (437)   |
| 中                              | あてはまる (%)              | 47.6              | (477)   | 41.7                   | (472)   | 77.4                | (474)   |
|                                | あてはまらない (%)            | 56.6              | (325)   | 42.7                   | (323)   | 72.5                | (324)   |
|                                | 合計 (%)                 | 51.2              | (802)   | 42.1                   | (795)   | 75.4                | (798)   |
| 下                              | あてはまる (%)              | 58.0              | (512)   | 46.1                   | (512)   | 78.6                | (510)   |
|                                | あてはまらない (%)            | 55.2              | (507)   | 40.5                   | (506)   | 71.3                | (505)   |
|                                | 合計 (%)                 | 56.6              | (1,019) | 43.3                   | (1,018) | 75.0                | (1,015) |

注1) 数値は、「どんな仕事をしたいかよくわからない」「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」「将来、社会でうまくやっていけるか不安だ」という項目に「あてはまる(「とてもあてはまる」+「まああてはまる」)」と回答した者の比率または実数を指す。  
 注2) +:  $p < 0.10$ , \*:  $p < 0.05$ , \*\*:  $p < 0.01$ , \*\*\*:  $p < 0.001$ 。

上から、作業仮説1-3は採択された。

#### 4.2 作業仮説2の検証：進路不安、職業的レリバンス意識、習得度の関連

次に、作業仮説2の検証を行う。

表3は、作業仮説2-1~3を検証したものである。それによれば、次の3点がわかる。

第1に、校内成績が上・中の集団においては、「学校での勉強は将来つきたい仕事に関係している」という項目に「あてはまる」と回答した者ほど、「どんな仕事をしたいかよくわからない」という項目に「あてはまる」と回答した者が有意に少なくなっている。教育内容の習得度が中レベル以上の場合、学んだことが身についているからこそ、そこに職業的レリバンスが見出され、「どんな仕事をしたいかよくわからない」という事態に陥りにくくなると解釈できる。逆にいえば、職業的レリバンス意識が向上しても、そこに習得度が伴っていなければ、「どんな仕事をしたいかよくわからない」という進路不安を低減する効果は期待できないということである。以上から、作業仮説2-1は採択された。

第2に、いずれの校内成績の集団においても、「学校での勉強は将来つきたい仕事に関係している」という項目と「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」という項目の間には有意な関連はみられない。以上から、作業仮説2-2は棄却された。

第3に、校内成績が下の集団においては、「学校での勉強は将来つきたい仕事に関係している」という項目に「あてはまる」と回答した者ほど、「将来、社会でうまくやっていけるか不安だ」という項目に「あてはまる」と回答した者が有意に多くなっている。教育内容の習得度が低い場合、教育内容に意義は見出されてはいるがそれが実際には身につけていないため、職業的レリバンス意識が高まると、「将来、社会でうまくやっていけるか不安だ」という進路不安が増大してしまうと解釈できる。一方、教育内容の習得度が中レベル以上であれば、職業的レリバンス意識の向上は「将来、社会でうまくやっていけるか不安だ」という進路不安と結びつかないということである。以上から、作業仮説2-3は採択された。

### 4.3 作業仮説3の検証：進路不安、職業的レリバンス意識、学校外活用機会の多寡の関連

最後に、作業仮説3の検証を行う。

表4は、作業仮説3-1～3を検証したものである。それによれば、次の3点がわかる。

第1に、「授業で学んだことを、学校外で活かせる機会が多い」という項目に「あてはまる」と回答した集団においてのみ、「学校での勉強は将来つきたい仕事に関係している」という項目に「あてはまる」と回答した者ほど、「どんな仕事をしたいかよくわからない」という項目に「あてはまる」と回答した者が有意に少なくなっている。教育内容の学校外活用機会が多ければ、当該内容を生きた知識として吸収できるため、職業的レリバンス意識が高まることで「どんな仕事をしたいかよくわからない」という事態には陥りにくくなると解釈できる。逆にいえば、教育内容の学校外活用機会が少ないと、職業的レリバンス意識の向上が進路不安の低減につながるとは限らないということである。以上から、作業仮説3-1は採択された。

第2に、「授業で学んだことを、学校外で活かせる機会が多い」という項目に「あてはまる」と回答した集団においても、それに「あてはまらない」と回答した集団において

も、「学校での勉強は将来つきたい仕事に関係している」という項目と「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」という項目の間には有意な関連はみられない。以上から、作業仮説3-2は棄却された。

第3に、「授業で学んだことを、学校外で活かせる機会が多い」という項目に「あてはまらない」と回答した集団においてのみ、「学校での勉強は将来つきたい仕事に関係している」という項目に「あてはまる」と回答した者ほど、「将来、社会でうまくやっけていけるか不安だ」という項目に「あてはまる」と回答した者が有意に多くなっている。教育内容の学校外活用機会が少ないと、教育内容の実際の活用場面が理解されにくくなるため、その状況で職業的レリバンス意識が高まると、「将来、社会でうまくやっけていけるか不安だ」という進路不安が増大してしまうことになると解釈できる。ただし、教育内容の学校外活用機会が多くても、職業的レリバンス意識の向上は「将来、社会でうまくやっけていけるか不安だ」という進路不安を低減することにはならないという点には留意が必要である。教育内容の学校外活用機会の多寡には、「将来、社会でうまくやっけていけるか不安だ」という進路不安を低減する積極的な効果はない。当該機会が少ない状況の中で、職業的レリバン

表4 「進路不安」×「職業的レリバンス意識」×「学校外活用機会の多寡」

|                         |                        | 分析対象は専門高校の生徒 Q51A・B・F×Q9B×Q18D |         |                        |         |                      |         |
|-------------------------|------------------------|--------------------------------|---------|------------------------|---------|----------------------|---------|
| 授業で学んだことを、学校外で活かせる機会が多い | 学校での勉強は将来つきたい仕事に関係している | どんな仕事をしたいかよくわからない              | N       | 自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う | N       | 将来、社会でうまくやっけていけるか不安だ | N       |
|                         |                        | **                             |         |                        |         |                      |         |
| あてはまる                   | あてはまる (%)              | 49.2                           | (683)   | 45.2                   | (682)   | 78.3                 | (681)   |
|                         | あてはまらない (%)            | 59.7                           | (273)   | 44.5                   | (274)   | 81.3                 | (273)   |
|                         | 合計 (%)                 | 52.2                           | (956)   | 45.0                   | (956)   | 79.1                 | (954)   |
|                         |                        |                                |         |                        |         | ***                  |         |
| あてはまらない                 | あてはまる (%)              | 54.5                           | (591)   | 38.7                   | (587)   | 77.8                 | (586)   |
|                         | あてはまらない (%)            | 54.6                           | (716)   | 40.2                   | (711)   | 68.6                 | (711)   |
|                         | 合計 (%)                 | 54.6                           | (1,307) | 39.5                   | (1,298) | 72.8                 | (1,297) |

注1) 数値は、「どんな仕事をしたいかよくわからない」「自分のやりたい仕事をしぼるのはまだ早いと思う」「将来、社会でうまくやっけていけるか不安だ」という項目に「あてはまる（「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」）」と回答した者の比率または実数を指す。

注2) +: p<0.10, \*: p<0.05, \*\*: p<0.01, \*\*\*: p<0.001。

ス意識が高まると、「将来、社会でうまくや  
っていけるか不安だ」という進路不安を増大  
してしまうということである。以上から、作  
業仮説3-3は採択された。

## 5 結論

本稿では、専門高校の生徒を対象にして、  
教育内容の職業的レリバンス意識が高まるこ  
とが進路不安に対してもたらす功罪は何かと  
いう問いを検討してきた。本稿の分析結果は、  
次の3点にまとめることができる。

第1に、職業的レリバンス意識が高まるこ  
とは、進路不安に対してもたらしていた。功の側面として、職業的レリバンス意識  
が高まると、「どんな仕事をしたいかよくわ  
からない」という進路不安が低減した（作業  
仮説1-1の採択）。罪の側面として、職業的  
レリバンス意識が高まると、「将来、社会で  
うまくやっていけるか不安だ」という進路不  
安が増大した（作業仮説1-3の採択）。な  
お、職業的レリバンス意識と「自分のやりた  
い仕事をしぼるのはまだ早いと思う」という  
進路不安は関連していなかった（作業仮説  
1-2の棄却）。

第2に、職業的レリバンス意識が高まるこ  
とが進路不安に対してもたらす功罪は、教育  
内容の習得度（校内成績）によって顕在化し  
たり、顕在化しなかったりした。教育内容の  
習得度が中レベル以上の場合、職業的レリバ  
ンス意識が高まると、「どんな仕事をしたい  
かよくわからない」という進路不安は低減し  
た（作業仮説2-1の採択）。教育内容の習得  
度が下レベルの場合、職業的レリバンス意  
識が高まると、「将来、社会でうまくやっ  
ていけるか不安だ」という進路不安は増大  
した（作業仮説2-3の採択）。なお、教育内  
容の習得度を統制しても、職業的レリバンス  
意識と「自分のやりたい仕事をしぼるのは  
まだ早いと思う」という進路不安は関連し  
ていなかった（作業仮説2-2の棄却）。

第3に、職業的レリバンス意識が高まるこ

とが進路不安に対してもたらす功罪は、教育  
内容の学校外活用機会（授業で学んだこと  
を、学校外で活かせる機会）の多寡によっ  
て顕在化したり、顕在化しなかったりした。  
教育内容の学校外活用機会が多い場合、職  
業的レリバンス意識が高まると、「どんな  
仕事をしたいかよくわからない」という進  
路不安は低減した（作業仮説3-1の採択）。  
教育内容の学校外活用機会が少ない場合、  
職業的レリバンス意識が高まると、「将来、  
社会でうまくやっていけるか不安だ」とい  
う進路不安は増大した（作業仮説3-3の採  
択）。なお、教育内容の学校外活用機会  
の多寡を統制しても、職業的レリバンス意  
識と「自分のやりたい仕事をしぼるのは  
まだ早いと思う」という進路不安は関連し  
ていなかった（作業仮説3-2の棄却）。

以上の知見を踏まえると、本稿の含意とし  
て次の2点を指摘することができる。

第1に、進路不安に関する変数の取り扱い  
には慎重になる必要がある。本稿の分析結  
果によれば、職業的レリバンス意識と進路  
不安の結びつきは、「どんな仕事をしたい  
かよくわからない」「自分のやりたい仕事  
をしぼるのはまだ早いと思う」「将来、社  
会でうまくやっていけるか不安だ」とい  
った項目ごとに異なっていた。特に、「将  
来、社会でうまくやっていけるか不安だ」  
という進路不安は、職業的レリバンス意  
識の高まりとともに高まってしまっ  
てしまうといったように、他の進路不安  
に関する変数と異なる動きをしている点  
には注意が必要であろう。このことは、  
進路不安を操作的に定義する際に、これ  
らの項目を合算することには慎重になら  
なければならないことを示唆している。

第2に、専門教育を行う中で職業的レリ  
バンス意識を高めることの前提条件の意  
義である。確かに、専門教育を行う場  
合、生徒は教育内容の職業的レリバンス  
を認識しやすいだろう。しかし、本稿の  
分析結果によれば、生徒がどれほど教  
育内容を習得しているのか、教育内容を  
学校外で活用する機会がどれだけ



確保されているのかといった前提条件によって、職業的レリバンス意識と進路不安の結びつきは異なっていた。職業的レリバンス意識を高めることで進路不安を低減させるには、教育内容を的確に習得させることや当該内容を学校外<sup>ニ</sup>実社会で活用する機会を設ける必要がある。普通科高校と比べて専門性の高い教育を行っている専門高校においても、職業的レリバンス意識を高めさえすれば、進路不安が低減するという単純な図式は成り立たない。

最後に、本稿に残された課題について言及する。

本稿は、職業的レリバンス意識と進路不安の関係性について基礎的な分析を行ったに過ぎない。今後は、他の変数を踏まえて、より踏み込んだ分析を行うことが求められる。その際は、なぜ進路不安に関する個別の変数によって、職業的レリバンス意識との結びつきが異なるのかという点を追究していく必要があるだろう。

#### <注>

- 1 本田（沖津）（2000: 166）は、職業的レリバンスを「時間面では将来的であるが、主に社会、特に経済システム＝産業界が（教育内容に対して：引用者補足）期待する有効性」であると定義している。本稿では、仕事の世界へ移行する前の高校生を対象としているため、職業的レリバンス自体ではなく、職業的レリバンス意識を問題にする。
- 2 なお、高校生時点で進路不安を抱くことは当然であり、問題はないという見方もあるかもしれない。しかし、高校生のパネル調査データを分析した元治（2008）によれば、「着地不安」（本稿でいう「進路不安」）が高校3年時から高卒3年目にかけて増大する者は男女ともに60%以上にもなることが明らかにされている。したがって、高校生時点で進路不安を抱くことに問題はないという見方を単純素材に受容することは適切でないと考えられる。
- 3 一方、佐藤（2006）と異なり、伊藤（2006: 8）は、職業的レリバンスの認知（本稿でいう職業的レリバンス意識）と「着陸不安」（本稿でいう「進路不安」）は負の相関関係にあることを指摘している。
- 4 厳密には、これらの項目と本稿の分析データの項目との間でワーディングが微妙に異なっている部分がある。しかし、両者の差は回答結果を左右するほどのものではないと考えられる。なお、「自分の進路について今でも悩んでいる」という項目は本稿の分析データには存在しないため、分析できない。
- 5 本稿の仮説では、職業的レリバンス意識を独立変数として、進路不安を従属変数として想定しているが、独立変数と従属変数が逆の関係性を持つ可能性も想定できなくはない。この意味で、本稿の分析は、職業的レリバンス意識と進路不安の因果関係を厳密に確定しようとするものではない点に注意されたい。本稿は、佐藤（2006）と同様に、職業的レリバンス意識を独立変数として、進路不安を従属変数として想定することにする。
- 6 本稿の進路不安に関する変数については、男女間で回答の分布が若干異なっている。そのため、以下の分析を男女別にも行ったが、総じてみれば、男女間で分析結果は類似した傾向となった。

#### <引用文献>

- 元治恵子、2008、「若年層のキャリアデザイン・ライフデザインの変化——高校在学時から高卒3年目への変化」東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズNo.15.
- 本田（沖津）由紀、2000、「教育内容の『レリバンス』問題と教育評価——社会システム論の視点から」長尾彰夫・浜田寿美男編『教育評価を考える——抜本的改革への提言』ミネルヴァ書房、153-85.
- 本田由紀、2005、『多元化する「能力」と日本社会——ハイパー・メリトクラシー化のなかで』NTT出版.
- 、2006、「対人関係と高校生活・進路選択」石田浩編『高校生の進路選択と意識変容』東京大学社会科学研究所、71-80.
- 伊藤秀樹、2006、「専門高校における登校意欲の形成メカニズム——『ブラックボックス』の鍵は職業的レリバンス」第6回 SPSS Open House 研究奨励賞ポスターセッション展示論文.
- 文部科学省、2004、「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書——児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために」.
- 大桃裕史、2009、「共同実践型授業が将来不安に対して及ぼす効果——専門高校の生徒と普通科高校の生徒との比較」東京大学教育学部比較教育社会学コース編『都立高校生に関する調査報告書——専門高校に着目して』57-66.
- 佐藤香、2006、「若年者の『着地不安』——高校卒業生の意識をめぐって」石田浩編『高校生の進路選択と意識変容』東京大学社会科学研究所、55-70.